

論文審査の要旨

報告番号	保研 第 36 号		氏名	井上尚美
審査委員	主査	山本直子		
	副査	田平 隆行	副査	松成裕子
	副査	山下亜矢子	副査	木山良二
<p>Development and Validity of an Intrapartum Self-Assessment Scale Aimed at Instilling Midwife-Led Care Competencies Used at Freestanding Midwifery Units 助産師ユニットで行われる助産師主導ケアの実践能力を用いた 分娩期自己評価尺度の開発と妥当性</p> <p>助産師の専門的能力は、長年の経験で培われた実践的な経験の量と関係があり、助産院で助産師主導のケアを提供することで育まれるともいわれているが、その環境は現在の日本では厳しい。そこで、本研究では、助産師が出産する女性やその家族への質の高い助産師主導ケアが提供できるように、産科ユニットで働いている助産師が助産師主導ケアの実践能力を効率的に向上できる分娩期の自己評価尺度を開発することを目的とした。</p> <p>研究方法は、2016～2018年に2段階で尺度開発を行った。第1段階では文献レビュー、質問項目の妥当性の確認、専門者会議での議論、2回の予備調査を行った。第2段階での調査は、日本国内の65の産科施設で働いている助産師401名を対象に因子分析を行った。第1段階では、68項目からなる尺度が作成され、第2段階の最終版尺度はIV因子40項目で構成された。第I因子「産婦の意思と家族の出産を尊重したケア能力」15項目、第II因子「責任範囲をわきまえた急変時の判断と対応能力」9項目、第III因子「産婦の変化と母児の状態に合わせたケア能力」9項目、第IV因子「高い情報収集力と的確な総合判断」の7項目であった。尺度全体のCronbach's α 信頼係数は0.982、再テストの下級内相関係数は尺度全体で$r=0.794$であった。基準関連妥当性のG-P分析は、CLCMIPIレベルIII認証の取得状況、分娩介助の経験年数、分娩介助件数に有意な差を認めた ($p < 0.001$)。</p> <p>本尺度は、助産ユニットでの助産師の実践能力を基に開発が行われ、最終的に非言語的コミュニケーション、母子への緊急対応、効果的な分娩促進と産痛緩和、経験知と五感を使った総合的判断力と専門性の高い助産師主導ケアの実践を反映した項目で構成された。これは、国際助産師連盟 (ICM) の助産実践に必須の分娩期コンピテンシーも網羅されており、基本的な能力から高い専門性を示す助産師主導ケアの実践能力を自己評価できる尺度であった。</p> <p>審査の結果、5名の審査委員は、本論文は、出産する女性やその家族への質の高い助産師主導ケアが提供できる分娩期の自己評価尺度として独自性があると判断した。この尺度を用いることで、臨床での効率的な助産師教育に繋がり、早い段階での現場の質向上が望まれる。今後、臨床での助産学の発展に寄与することが期待されることから、博士 (保健学) の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。</p>				